

◆張桂娥「第9回東アジア日本研究者協議会における「現代児童文学に見る戦争の記憶と継承」パネル報告」

## 開催概要と趣旨

2025年10月31日（金）から11月2日（日）にかけて、韓国の翰林大学において「第9回東アジア日本研究者協議会国際学術大会」（EACJS9）が開催された。渥美国際交流財団関ログローバル研究会（SGRA）からは、「現代児童文学に見る戦争の記憶と継承」と題するパネルディスカッションが、1日（土）9:00-12:10に実施された。本パネルは、東アジア地域と国際社会における戦争の記憶が、児童文学というメディアを通じてどのように未来世代に継承され、再構築されているのかを多角的な視点から検討することを目的とした。

【パネル趣旨】 80年も前の第二次世界大戦の記憶が風化しつつある現在、ロシアによるウクライナ侵攻（後段の表表現に合わせました）やガザ紛争など、戦争が今なお隣り合わせにある状況において、未来の子どもたちに過去の戦争体験をどのように伝承していくべきか、児童文学ができることを再考するため、本パネルは企画された。本報告は、本パネルの構成と、当日に展開された密度の高い議論の成果を総括する。

## 第1部 東アジア地域において戦争児童文学は何を描いているのか

第1部では、東アジアの日本、中国、台湾における「戦争児童文学」の歴史的変遷と、それぞれの地域が内包する戦争の記憶の特性に焦点が当てられた。座長は英オックスフォード大学のオリガ・ホメンコ先生が務め、コメンテーターとしてイタリア・ボローニャ大学のマリアエレナ・ティシ先生と、英オックスフォード大学のフリアナ・ブリティカ・アルサテ先生が参加し、東アジアの議論に国際的な視座をもたらした。

**成實朋子先生：「日本の「戦争児童文学」のこれまでと課題—前川康男『ヤン』と薛濤『満山打鬼子（マンシャン鬼を打つ）』を通じて」**

大阪教育大学の成實朋子先生は、日本の「戦争児童文学」の成立と課題について、前川康男『ヤン』と中国の薛濤『満山打鬼子』の日中比較を通じて論じた。日本の戦争児童文学が十五年戦争に限定されがちであること、戦地・中国を舞台にした作品が海外での受容に困難を伴う構造的な課題を指摘。日中両作品の比較から、日本の作品が戦争の「加害」の側面を、中国の作品が「抵抗と勝利」をいかに描いたかという語りの特色を浮き彫りにした。

**齋木喜美子先生：「日本の児童文学は戦争の記録と記憶をどう紡いできたのか—沖縄戦を題材とした児童文学は、子どもたちの未来に何を届けるのか」**

関西学院大学の齋木喜美子先生は、アジア太平洋戦争で唯一地上戦が展開された沖縄戦を題材とした児童文学を考察した。物語化が遅延した歴史的経緯を踏まえつつ、1960年代半ば以降の作品が「命（ヌチ）どう宝」の精神に基づき、愛国美談ではない真実の語りを追求する使命感を担ってきたことを強調し、戦後80年を迎える中での今後の語り継ぎの方向性を総括した。

**張桂娥：「台湾児童文学における戦争の語りと記憶の継承 — 『夢想中的陀螺』と『冷不防』が描く戦争体験」**

本パネル企画者である東呉大学の張桂娥は、台湾の戦争児童文学の変遷を概観し、陳玉金の『夢想中的陀螺』と楊雲萍の詩絵本『冷不防』の2作品を分析した。台湾児童文学における戦争の語り、歴史的記録から個人的・情緒的な共感を重視する潮流へと変化していることを指摘し、子どもの想像力を通じて未来世代へ提供される価値を探索した。

#### コメンテーター・座長による総括（第Ⅰ部）

コメンテーターのフリアナ先生とマリアエレナ先生は、東アジアの戦争の語り、過去の「アジア太平洋戦争」に深く根ざしているのに対し、コロンビアの「武力衝突」が現在進行形である点に触れ、過去の記憶とどう向き合うかという東アジアの課題が、現在進行形の地域にも重要な示唆を与えると述べた。また、沖縄と台湾の発表に見られた「庶民の視点」「抵抗の記憶」の強さは、地域の文化的な特性と深く結びついている可能性を示唆した。

座長のオリガ先生は、東アジアの発表が、異なる歴史的背景を抱えつつも「記憶の継承」という共通の課題に向き合っている点を高く評価した。特に、戦争経験者が少なくなる中で、物語が「歴史の事実」を伝える機能から、「情緒的な共感」を喚起する機能へとシフトしている傾向は、普遍的な現象であると指摘した。第Ⅰ部は、東アジアの複雑な戦争記憶の様相を明確化し、次の国際比較のセッションへの架け橋となった。

#### 第2部 戦争児童文学は何をどのように語り継ぐのか

第2部では、焦点を国際的な視点へと移し、戦争や暴力、災害の記憶が、イタリア、コロンビア、ウクライナといった異なる文化圏の児童文学でどのように語られ、継承されているのかを議論した。座長は張桂娥が務め、コメンテーターには成實朋子先生と齋木喜美子先生が参加し、東アジアからの視点で国際的な議論を補完した。

##### マリアエレナ先生：「記憶と物語の交錯 — イタリアと日本を結ぶ視点：戦争と災害をめぐる日伊児童文学の対話」

イタリア・ボローニャ大学のマリアエレナ・ティシ先生は、東日本大震災後の日本の児童文学が、第2次世界大戦の記憶を物語に組み込むことで共感を喚起する手法に着目した。朽木祥『パンに書かれた言葉』と、福島や広島の大原爆をテーマとしたイタリア人作家の作品との比較を通じて、日伊の児童文学が、他者への理解を促し、「記憶の力」を通じて希望を描くという共通の機能を持つことを論じた。

##### フリアナ先生：「コロンビア児童文学における暴力とトラウマ — 娘と読む絵本が語る記憶と希望」

オックスフォード大学のフリアナ・ブリティカ・アルサテ先生は、研究者および母親としての視点を交差させ、母国コロンビアの武力衝突を背景とした児童絵本を取り上げた。これらの絵本が、武力衝突や避難といった現実を子どもの視点から「語られざる戦争」として捉え、トラウマの表象に光を当てている点を考察。児童文学が暴力の記憶を再構築し、共感と希望の語りを通じて平和教育に寄与する可能性を論じた。

##### オリガ先生：「ウクライナの児童文学における戦争の変遷 — 受け継がれた記憶から、子どもたちの身近な現実へ —」

オックスフォード大学のオリガ・ホメンコ先生は、ウクライナの児童文学における戦争の変遷を発表した。ソビエト時代の英雄的な語りから、2014年および2022年の侵攻後に「身近な現実」としての戦

争を描く文学が急増した経緯を説明。近年の作品は、戦争が「日常」として認識される中で、子どもの心理的な苦痛に寄り添い、現在を生き抜くための支えとなる機能を果たしている点を強調した。

### コメンテーター・座長による総括（第2部）

コメンテーターの成實先生と齋木喜美子先生は、国際比較を通じて、東アジアの戦争児童文学が持つ特殊性と普遍性がより明確になり、今後の研究において、トラウマ研究や平和教育といった学際的な枠組みを取り込む必要性を再認識させられたと述べた。

座長の張桂娥は、第2部が示した、イタリアと日本の「戦争と災害」の交錯、コロンビアの「進行形の暴力」の表象、ウクライナの「日常の現実」としての戦争という異なる文脈が、すべて児童文学を通じて「子どもの心を守り、希望を継承する」という共通の目的に収束している点を強調した。

### 総括と学術的貢献

今回の SGRA 企画パネルは、東アジアの戦争記憶の多層的な様相を明確にした第1部と、国際社会における暴力とトラウマの普遍的な語りを提示した第2部が連携し、補完的な視点を提供した。

このパネルを通じて、「戦争の記憶」は単なる過去の記録ではなく、児童文学というメディアによって変化し、再構築される「生きたナラティブ」であることが明確に示された。特に、戦争経験者が少なくなる中で、物語は「歴史の事実」を伝える役割から、「感情やトラウマへの共感」を通じて希望やレジリエンス（回復力）を育む役割へと進化していることが確認された。

本パネルの最大の学術的貢献は、「記憶の継承」というメタ概念を、東アジアの特定歴史に根ざした議論と、国際的なトラウマ論に基づいた議論とを交差させた点にある。これにより、児童文学研究が、地域研究の枠を超え、平和学、トラウマ理論、教育学といった学際的な領域と深く結びつく可能性が示唆された。本パネルの議論は、ポストコロナ、そして国際的な紛争が続く現代において、文学が未来世代に何を語り継ぎ、どのような価値を提供できるのかという、喫緊の課題への重要な示唆を与えたと言える。

### 参加者からのメッセージ：セッション後の提言と洞察

本パネルの多角的かつ活発な議論を総括するにあたり、登壇者およびコメンテーターの先生方から、セッションを終えての深い洞察と貴重なメッセージを頂戴いたしました。

**成實先生：** 今回のパネルでは、日本語で、普段聞くことのできないような話をたくさん聞くことが出来、いずれの話も大変興味深く、自分としても大変勉強になった。戦争が過去のものではなく、現在進行形で進んでいるという不幸な状況の下、児童文学の形で子どもたちに語り継がねばならないということを各地域の大人たちは感じており、それぞれに活動をしているのだという事が分かった。

**齋木先生：** 世界中で戦争に対する不安が高まっている現在、どうやって平和な未来を構築していくかということは、どの国にとっても重要な課題である。悲惨であればあるほど戦争の話は遠ざけてしまいがちだが、戦争を遠い過去にせず「私たちの問題」として次代の子どもたちに語り続けねばならないと痛感した。各国の作品事例から、戦争の物語が現在進行する戦争にも歴史的想像力を喚起させることを学んだ。また抑圧や差別がいずれ大きな戦争につながるということについても考えさせられた。沖縄は歴史的に「周縁」として取り扱われてきた地域だが、今後も周縁にこだわり、「どうして戦争が起きるのか」「私たちに何ができるのか」、児童文学を通して問い続けていきたい。

**マリアエレナ先生：** このようなパネルディスカッションに参加することは、同じ分野の研究者と交流できる素晴らしい機会だ。各地で戦争が続く現状において、私はいつとき自分の仕事の意義、そして戦

争と児童文学の関係を考察することの有用性に疑問を抱いた。しかし、私たちの研究を共有して下さった方々からのフィードバック、異なる文化圏の児童文学作品にも共通点があるのだという確信、そして何よりもオリガ先生の実体験を伺ったことによって、児童文学を研究する価値への信頼を取り戻し、今回の発表で紹介した小説の主人公たちのように、私の中にも希望が再生した。これからも、特に児童文学の価値をまだ知らない人たちに、その重要性を伝え続けていきたいと思っている。

**張桂娥：** 今回のパネルを通じて、戦争における加害と被害の歴史を学ぶ上で、加害者側の国民が平和について主体的に学び続ける機会を確保することの重要性を改めて認識した。同時に、被害を受けた人々が抱えてきた苦しみや経験を、児童文学という媒体を通して国際社会へ継続的に伝えていくことの意義を強く感じた。戦争の残酷さや非人道性を未来に繰り返さないためには、被害者の視点に丁寧に向き合い、人間の尊厳を守る平和教育を継続的に実践することが不可欠である。今回得られた示唆を踏まえ、今後も多様な立場の声に耳を傾けながら、平和の理念を学び、次世代へ確実に継承していく必要性を深く実感している。

### 謝辞

第9回東アジア日本研究者協議会という国際的な舞台で、これほど深く実りある議論を展開する機会を提供して下さった渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA）に心より感謝申し上げます。また、遠路はるばる韓国・翰林大学に「移動」し、熱のこもった発表と討論、座長（司会）を務めて下さった全ての先生方に対し、改めて深い敬意と感謝の意を表します。この知的交流の場が、持続可能な相互理解と平和な未来の構築に寄与することを願っています。（文中敬称略）

当日の写真を下記リンクよりご覧いただけます。

<https://www.aisf.or.jp/sgra/wp-content/uploads/2025/12/Photos-from-CHANG-Kuei-es-Panel.pdf>

<張 桂娥（ちょう・けいが）CHANG Kuei-E>

台湾花蓮出身、台北在住。2008年に東京学芸大学連合学校教育学研究科より博士号(教育学)取得。専門分野は児童文学、日本語教育、翻訳論。現在、東呉大学日本語学科副教授。授業と研究の傍ら、日台児童文学作品の翻訳出版にも取り組んでいる。SGRA 会員。